



東京港

概 説

I. 隅田川口改良工事

東京築港に關しては明治十三年以來、夙に其の必要を高唱せられ、爾來計畫上幾多の研鑽を重ね、又東京市民、多年之が實現を翹望せしも機運熟せず、明治三十九年豫算 260萬を以て第一期隅田川改良工事を起し、漸く濁筋の浚渫及埋立地を築造し、永代橋より品川沖に至る航路を開通し、其の便宜多大なるに鑑み、明治四十四年工事の終了するや第二期改良工事として更に豫算 24,680,000圓を以て永代橋下流より、品川沖砲臺外干潮面下 12 尺の深度に達する航路を新設し一部幅員は増加を圖り、之が浚渫土砂を以て芝浦地帶の埋立地を埋築せり、而も以上の工事は大型駁船、吃水 10 尺内外の船舶の通航を立眼とせるに外ならず、爾後の船舶の來集漸く繁く、一大修築の機運を促して止まず、依つて大正十一年より向ふ五ヶ年の繼續事業として、工費 680 萬圓を以て第三期隅田川口改良工事起工中の處、偶々大震災に遭遇し一時事業中止の已むなきに至りたるもの同十三年更に工事を續行せり。一面震災直後救援物資の非常輸送に當り船舶の冒險的入津と犠牲的荷役の實況に徵し之が焦眉の急に應ぜんが爲、應急施設として工費 184 萬圓を投じ、芝浦日の出町棧橋並上屋及び臨港鐵道の建設を急ぎ大正十五年三月之が棧橋上屋の使用を開始し昭和五年臨港鐵道の開通を見、以て水陸連絡設備の一端を具現せり。更に震災後芝浦地先に出入する船舶頓に激増し之が物貨の增加を考慮するときは、港内の狹隘、船貨荷役の困難は前述の既定工事の完成を見るも到底緩和さるべきもなく茲に第三期既定計畫を、工費 190 萬圓に變更増額し、船貨の增加に備へ、他面水上交通の安全を期せんと、航路船溜の擴大、埋立地の増設、航路標識の設置、6,000噸級の船舶に對する繫船岸壁の築造、及び港内面積、260 萬坪餘を呑吐する假防波堤の築造等東京築港の端緒とも言ふべき計畫を樹て、工事進捗中の處、本年三月末を以て之が竣工を見たり。

2. 東京港修築工事

惟ふに上述の施設たるや、僅かに年額 360 萬噸の貨物の港内荷役をなし得るに止り、諸般の港灣機能を發揮せしむ可き施設は殆んど之を缺除し、港の眞價を發揮し、年々輻輳する百貨を市民に迅速且經濟的に消化せしめんには、之が擴築増設を一日も忽にする事を得ず、加ふるに復興事業の完成せる帝都に於て物貨移動の大勢に順應せんとするに當り東京港の修築は最も緊要なる事業と稱すべきなり。